

## 北京より多倫まで (一)

## 小牧實繁

昭和五年四月十日、木曜日、曇。五時起床、六時朝食、六時二十分一二三館を出で、先づ延英舎に水野、江上兩君を、更に東方文化研究所に駒井君を誘ひ七時西直門車站に至る。七時五十分西直門車站發、張家口行列車中の人となる。

居庸關、青龍橋等を通して途中下車を思はないではないが、此の行は單なる名所見物が目的ではないから割愛する。列車中に持參の辨當を喫す。

二時懷來縣を通過。此の邊には多少の内陸砂丘が存在するのを見る。

三時前沙城を通過。此の邊には蒲鉾形馬車や泥土の家屋が多く、滿洲の野を思はしめるものがあり、墓を被ふに礫石を以てし、又た堀井戸の卓越風側に半圓形の土壁を繞したのは風の強

さを物語るものか。前者では墓地の被覆土が風によつて運び去られる事を防ぎ、後者では風により地表を流れる土砂の井戸に落ちる事を防いで居るものと解せられる。

村には城壁を繞らし、町の附近には野菜畑が集約的に耕作せられて居る。既に黄土らしいものを見るが、固有の黄土ではなく再堆積のものらしい。河には水があるが、田野には未だ青いものは少く、柳も芽を出したものがなく、此邊の季節が北京のそれとは大分遅れて居るのが解る。殊にその城壁の裾部が砂風によつて恐ろしく風蝕を受けた跡の見られるのは凄慘の感を起させる。

沙城の車站では玉盛明なる煮酒を賣つて居る地酒であるが、酒を構内の露店で賣る所は何と

云つても支那的の風景である。

四時二十分下花園を通過。此の邊に石炭層の露出があり、同乗の顧先生に聞けば之れが雞鳴山であると云ふ。

五時辛莊子を通過。此の車站の手前に多くの石灰洞が見られ、辛莊子には又砂丘が多く、中にはバルハン型のものも尠くない。土人は砂丘のことを沙子(Sha tsu)云つて居る。

五時半宣化府を通過。之れは可なりの町で、亞細亞石油會社の貯藏庫なども見られる。

六時十分沙嶺子を通過。此の邊には水田があり、雪解けの水を以て田圃に灌漑して居る作業が見られる。田の境界區分が畑の如く大でないのは此の地に於ける水田の貴重さを物語る。

七時張家口着。荷物及び執照の可なり嚴重な検査であつたが、別段大した困難もなく、日本旅館に入る。此の地唯一の日本旅館である。張家口は可なり立派な都會で、電燈などの設備もあり、都會に來たと云ふ感じは起させるが、風

は強く、砂塵は飛び、四圍の山々は未だ褐色に枯れて居て、如何にも死せる都、砂漠の眞只中に來たと云ふ感なきでもない。八時食事、日記を記して十時就寢。

四月十一日、金曜日、曇、靜。八時半起床、九時朝食、出でて領事館に至り、領事山崎誠一郎氏に就いて張家口附近の事情を拜聴し、それより東太平街に盛島角房翁を訪れ氏の談に聽く其の要領を左に録す。

張家口より東北多倫に至る中間、張家口より百八十支里の所に蒙古人の部落があり、此所に成吉思汗の遺跡があつて、毎年舊六月に御祭があるが、此れより北方には蒙古人が牧畜に従事して居る。

多倫の閃電河より嘗て龍骨と稱する化石を發見し、數年前盛島氏自身も實見したが、結局合衆國探檢隊アンドリュース博士一行に賣却せられ、彼等によつて研究發表せられた。又宣化府より百姓の石器を賣し當地の骨董店に賣るもの

が往々にしてある。

蒙古人は大腿骨で作つた笛を愛用し、殊に喇嘛寺で用ひられる。喇嘛寺では又御經を讀む時人肉を捏ねたものを用ひ、讀經の終つた後之れを焼くのであると。

盛島翁は童男童女百人分の頭蓋骨で作つた西藏製の珠數を有するが、一珠毎に金、銀、銅珊瑚、孔雀石等の象嵌があり、大體之れを有するものは高僧のみでありその靈驗あらたかと信ぜられて居るので、蒙古人の之れを有するものを貴ぶことは想像外である。此の珠數をカボル(Khabol)と稱する。因みに西藏人は銀張り、漆張りの頭蓋を寺院に於いて杯として使用するのみならず、普通人も又之れを日用品として用ふ矢張り男女の頭蓋骨を一對として用ふのであると。

今日外蒙古に入ることは殆んど不可能である翁の如き蒙古通でも漸くのことである。それは大體蒙古人は日本人に對して好意を有するが、

露國官憲の反對が強いからである。勿論内モン古では支那語が通じ、而も北方に至るに従ひ土匪が少なく安全であると。

河套舊王府に成吉思汗皇后の柩と稱する木製のものがあつたが、祭の時には駱駝、馬、煙草の如きものを之れに供へ皇后は今尙生ける如く考へられる。舊三月廿一日が祭日であるが、口を嗽がなければ何人も内に入ることは許されぬと云ふ。

その黄河附近に於いて支那人は耕作に従事するが蒙古人は遊牧すると。

以上の如きが盛島翁の談話の要項であるが、此方で聽き出せば翁の談話は種の盡さる所がない。翁の如きは誠に蒙古事情の生字引とも云ふべく、その知識は吾人の想像だも及ばぬ辛苦艱難國土的半生の賜物であるのである。

一時頃宿に歸り中食、食後盛島翁に伴はれ翁自家用の馬車で杭公館に至り杭錦壽氏を訪れる氏は國民黨委員杭成齋氏の兄で、北京蒙文新聞

社社長であり、氏の次男は大阪外國語學校蒙古語教師であり、察哈爾の有力者である。氏の談に聞く。

北平の西北一百支里に方郷山の地下に洞窟があり、附近の廟に、修道の僧が多く居る。七十七の洞穴があり、その全延長二三百支里、入口は狭いが修道僧の案内によつて内部に達するこゝとが出来る。

蒙古人の天幕に入る場合には番犬に注意する必要がある、先づ中の人を呼ぶがよいと。

以上の如きが杭氏談話の要領である。氏は人と對話しながら思ふ存分<sup>あきび</sup>欠伸の出来る人である。それが蒙古人に共通の禮儀であるか如何かは知らぬが、呑氣な蒙古人の心情が羨しくなる。棗<sup>ナツ</sup>の御馳走になつて歸る。

歸途骨董店に立寄り、土器、銅器等を購入、四時過歸宅。

八時驛に至り島村、玉井兩氏の來着を迎へ、十時就寢。

北京より多倫まで

四月十二日、土曜日、曇。六時半起床、八時出發、宿の車屋を案内人として玉井、駒井、江上、水野の諸君と共に北郊に出る。張家口の街には兩側に小溝があり、之れが用水の役を務め撒水などに利用せられて居る。蒙古語と支那語

第一圖



とて書かれた看板や廣告が眼に着く。北郊の地形は兩側に山が迫りその中の谷が蒙古の方へ通ずるのである。景勝の地であることが理解せられる。毛皮の市場があり、又附近には英國人某の店などもある。駱駝の群なども見られ如何に

第二圖



第三圖

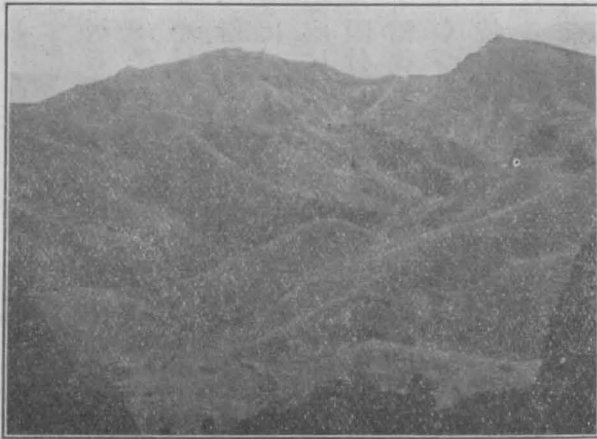


も呑氣な景色が氣に入る。第一圖は張家口北郊の毛皮商のある邊の風景である。

元寶山村に差かゝつた時此所に洞穴(第二圖)があるのに水野君が氣着き駒井君と共に試掘を始めた。後から到着した我々も共同して發掘す

る。一時頃中食、一先づ英氣を養ふこととする。食後沙兒溝（又沙溝兒）の谷を溯る。支那人がこんな洞穴ならば此の谷の源に澤山あると云ふからだ。成る程自然洞窟が澤山ある。火成岩中に出来たもので、總數二十一有ると支那人は云

#### 第 四 圖



北京より多倫まで

ふ。住居として利用せられたと思はれる節がある。それは岩を掘つて水を得たらしい形跡からも察せられる。その成因は熔岩洞窟ではないが熔岩中の比較的弱い部分に出来たものかと思はれる。唯それが全然自然のものであるか、一部は人工によるか、その所は不明である。第三圖は沙兒溝の洞窟の或るものを谷から望んだ所第四圖はその洞窟の一つから外部の山を眺めた所を示す。

三時半元寶山村に歸り午前中の發掘を繼續する。之れは近く四人連名で人類學考古學關係の雜誌に發表の筈であるが、一寸興味あるものが發見せられた。

夢中になつて土を掻き廻して居る時、丁度五時半頃一人の巡查らしいものが遣つて來た。手傳つて呉れて居た數人の支那人がはたと手を止め鍬を隠して互に顔を見會せて居る。當惑そのものの様な顔つきである。其處で我々もはつと氣が着つた。咎められるのだと覺悟をする。巡

査は恐ろしい身振りで降りて來いと命ずる。皆んなすぐすと降りる其處へ騎馬の巡查が又一人現れて居る。何でもいゝから自分について來いと云ふ。恐ろしい劔幕である。どうなる事かと思ふと小兒の時悪い事をして先生に叱られた時より一層恐ろしい思ひがする。騎馬の巡查の行くままに、徒歩の巡查に監視されながら無言のまゝ警察に連れて行かれるのである。村の者等は變な眼付で我々を見る。どんな悪い罪人があつても爾後自分はそのものを見つめないで置かうとつくづく思つた位、罪人として眺められるのは氣持の悪いものである。更に警察へ連れて行かれると云ふ事は！

警察へ着く迄は未だそんなに心細くはなかつた。巡查を連れて日本領事館へでも行つて辯明出來る望みががつたから。處が警察へ近着いた氣はひがして巡查等が警察らしい所へ這入つて行かうとした時、我等は尠からず躊躇した。強情張りの水野君等は警察へ通ずるらしい道を右

へ曲る事を肯んじない。巡查等は何でもいゝから文句なしに來いと言ふ。團長格の自分は決心しなければならなくなつた。一同は大人しく兎に角行く事に決した。然し此の道は地獄へ通ずる様にも心細く思はれたのである。

警察へ着くと見物は黒山の様である。實際黒山であると云ふ感じがした。幾つかの支那人の眼が我々に向けられて居る。處が不思議、例の騎馬の巡查は態度一變して我々に親切である。御座りなさいと切りに勧める。實際こんなに難有い感じのしたことは少ない。彼れの顔が菩薩の様に見えた。無言の中に此方の意志が通じたのである。唯彼れの下役なる徒歩の巡查は尙がみ／＼言つて居る。見物は黒山の様である。墓を掘り人骨を發いた罪人と考へて拘引した手前そう安々と放釋は出來ぬ。一々發掘品を検査する。土器片や石器片は簡單に辯明が出来る。然し鹿やその他の骨片がある、殊に人骨らしい骨片もある。平服の巡查らしいのがそれを手にし

た。自分は動物の骨で頑張つた。實際そう思つたから。その辯明の衝に當る水野君の苦勞は想像外である。兎も角無難に検査は済んだ。やれやれ放釋かと思ふとこれから本署で檢べると云ふのである。

又ぞろ／＼と見物人に跡をつけられながら本署に行く。本署に行くといふ流石に見物の野次馬を追つ拂つて呉れた。署長も副署長格の人も到底も親切である水野君が一生懸命辯明して呉れて居る間も他の者は筆談などで意志を交換し、日支の親善を語ると云ふ餘裕が出来た。水野君の方の折衝は中々捗らないらしいが、外交上手の支那人相手とあらば致し方あるまい。罪なき者と解れば、罪なき者を拘引した罪は支那側にある譯で、此の事件が新聞にでも出て公けになれば、我々も將來困るが支那官憲も困る譯であり、之れを秘密にしなければならぬ、然し同時に拘引したとすれば一應の理窟はつけなければならぬ。それでごた／＼して居たのであると

思ふ。然し一方では誠に鄭重に取扱ひ色々好意を示すと云ふ譯で、漸く八時頃になつて我々は墓を發いた者でない、人夫の支那人は好意を以て我々の仕事を助けたもので勿論祖先の墓を發いたものではない、特に人夫は墓を發いたものではないことを我々から元寶山村村長に辯明すると云ふことで結末を着け様と云ふことであつた。そこで元寶山村村長の來ることを持つたのであつたが、勿論それは形式で結局彼れは姿を見せず、もう歸つても宜敷からうと云はれて警察署を出る。一番下役の徒歩の巡查ばかりは、自分の顔がつぶれたと思ふのが、又自分の失態になつたことを残念に思ふのか盛に喧かしくわなつて居るが、騎馬の巡查と私服の刑事とは親切にも街まで見送つて呉れる。河原には十四日の月が煌々と輝いて居る。こんな一時に空腹を感じ月が澄んで眺められたことは又とない。

八時過宿に歸る。山崎領事、盛島翁、島村氏等が心配相に待たれて居た。事件を傳へ聞いて



心配して居られるのかと思つたら、どうもそうでないらしい。皆んな未だ今日の事件は御存知なく、只歸りが遅いので、もつと重大な事件が起つたのでは無いかと心配して居られるらしかつた。心配かけても悪いと思ひ、何氣なき風で済ます。

八時半宿を出て車で「萬豐源和記便飯店」と云ふ料理屋へ行く。山崎領事、盛島翁等の案内である。此所は有名な成吉思汗料理で聞え、之れは北京などにもあるが張家口がその本場であると云ふのである。庭の露天で爐を圍み、周圍の長腰掛に片足を掛け立つて食ふので、鯨尺の一尺より長い物指の様な箸で、じい／＼と脂で熾える、薪の上の金網からも未だ血の滴る様な羊の肉をとつて酢醬油に香料を交へたもので味をつけ英雄らしく頬張るのだから本當に成吉思汗料理の名に恥ぢない。冬でもこんな露天で雪を被りながらつく／＼と云ふのであるから豪氣である。

盛島翁から蒙古では正月元日日出に山頂に上り牛乳を四方に措き四方拜を終りそれから家に歸つて火で羊を焼き之れを神に捧げ、その後食事をとると云ふ事など聞く。

十時、成吉思汗料理に満腹し、市内を散歩して蒙古の土産として煙草、菓子等を購入し、十時半歸宿。盛島翁推薦の顧介眉氏が來られ明日の打合せをなし、準備を調へて十二時前就寢。本日發掘の主なる品は、頭蓋骨破片(?)、鬲の脚部破片、燧石、土器、羊又は鹿の齒等であつて元寶山洞穴が石器時代の遺跡であることは明かである。

四月十三日、日曜日、晴。午前四時半起床、五時半朝食。朝食前、暫らく通信も利かぬと云ふので郷里へ通信して置く。六時半準備を整へ汽車管理處に至り自動車の出發を待つ。七時出發。車は貨物自動車(第五圖)で可なり大きいのであるが、鮓司詰めにされるので身動きもならぬ。大體定員と云ふものがなく御客があれば皆

第五圖



んな乗せるのだからたまらぬ。日本の田舎の満員の乗合自動車でも此れに比べれば未だ極樂である。脚を延ばすことすら出来ぬ。初めに置いた位置からは寸分の移動も不可能である。春とは云へ風は尙寒い、頸巻の隙から容赦なく入り

北京より多倫まで

第六圖



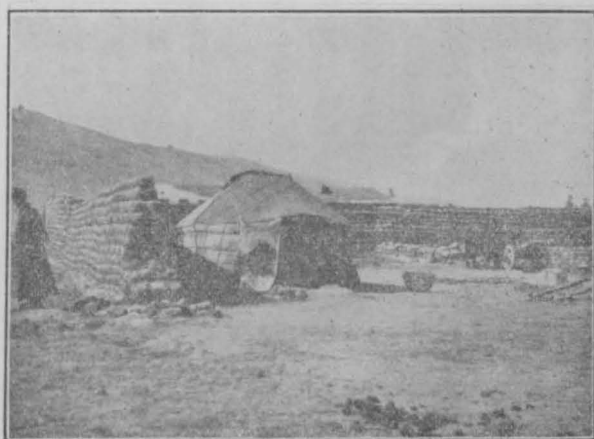
込む。然し幸か不幸か荷物と肉體とが密接に難居して居るのでそれ程寒くもない。そして沿線の風景は如何であらう。邊城を越すと其處には未だ嘗て書物の中でしか見なかつたステツプの景觀が展開するではないか。邊城の上には鄂博<sup>オボ</sup>

が見られる。異様の風景である。草地には羊の群、牛馬の徘徊を見、風物は愈々蒙古的となるが、唯草地は殆んど全部耕作せられて居る。未だ此の邊には支那人の入込んで居るものが相當多いのであらう。

第七圖



第八圖



第六圖は邊城邊の羊の放牧を示す。

十時半張北縣に着下車して中食と云ふことになる。こんなにやれやれと思つたことはない、身體は伸び伸びとする。唯張北縣と云つても名のみ的小都會で荒漠たる曠野の中の一聚落であ

る。第七圖は張北縣汽車站に於ける井戸から水を捲き上げ汲んだ所を示す。

十一時半再び車上の人となり難行を續ける。

## 第九圖



羊群、馬群、牛等を多く見る。又所々に鹹湖があり曹達の白く結晶したのが見える。遠望すれば

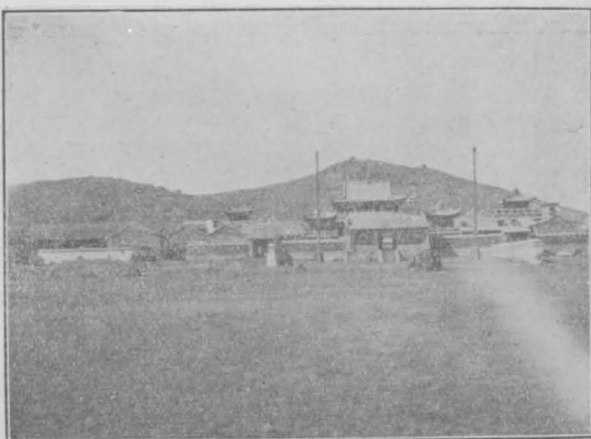
ば雪かと思はれ、湖岸に白く浪立つかとも疑はれる。此等地物と地上の生活を除けば其處には唯平坦々たる果てしなき曠野の擴がりを見るばかりである。

二時四十分馬拉蓋廟着。此所には寫眞の材料になる様なものもあり、殊に嬉しいのは近くに蒙古包があり、(第八圖)馬糞堆などがあることだ。(第九圖)蒙古包の住者は親切に中に入ると云ふ包の直径は精々二間足らずで、入口を入ると其處の正面にかまどと鍋掛とがありその奥正面に卓子、その奥正面包壁に近く夜具が積まれて居り、中央向つて右側には食器類、向つて左側には箆筩が置れて居るが、持物は至極簡單である。唯入口近くに犬の様な一匹の犢が置かれて愛撫せられて居るのには驚いた。然しよく考へて見ればそれが蒙古なのである。包の正面、平面、天井の構造の模様などを寫生する。

馬拉蓋廟の境界には一種の積石があり、(第十圖)又一般民家の周圍には泥炭を四角に泥炭地

から切取つたものを積重ねて石垣の代りとして居るものが見られ、(第八圖)異様の風景にすつ

第十圖



きり魅了せられる。

再び車上の人となることを好まぬが、自動車にも先の豫定があると思え容赦なく出て行く。

車は矢張り同じ様な平坦な地形の所を多倫の方へと進む。四時頃だつたと思ふ、二人の騎馬の人間が自動車の向つて右側の少し小高い方から音もなく現はれた。そして脚音も低く自動車に平行して走つて来る。自動車は速力を弱めた。強いて逃げ様としては射たれる恐れがあるからだ。騎馬者はちつと此方を見ながら、そして氣味悪く腰の所へ手をやりながら、とつとつと自動車に近づきながらそして殆んどそれに平行に走つて来る。同乗の支那人達は皆んな異常に緊張し初めた。黒龍省方面へ歸省すると云ふ一人の支那兵は拳銃を出した。顔色蒼白と云ふ迄に緊張して居る。安全瓣を外して身構へした。何と云ふ緊張であらう。周圍の氣配で我々日本人も漸く、騎馬の士の甚だ怪しいものであることに氣付いた。然し身には寸鐵を帯びない。罐切りか鉛筆削りの小刀位しか持たぬ悲しさ。何とすることも出来ぬ。頼む所は支那兵士の一挺の拳銃と、運轉手助手合せて二十六人と云ふ同勢

の肉弾のみである。

支那兵の拳銃が厄介と思つたのか、一行が多過ぎると思つたのか日本人が恐ろしいと思つたのか、騎馬の士は漸く歩を緩めた。諦めたらしい。自動車は速度を速めた。そして前進を續けたのである。時刻と云ひ場所と云ひ、彼等騎馬の士が馬賊の前哨であつた事は確かである。それは翌日からの顧先生の警戒振り、小心なる氣使ひ振りで知れることになり、又張家口に無事歸着して之れを盛島翁に語つた時も翁は之れを否定せず寧ろ肯定の語氣を漏されたのでよく知れた。

五時半閃電河を渡る。此所では何でもない小さな河である。水も少く、龍骨を出し相な崖も認められない。

六時半、多倫邊城に着、多倫までは前途僅かであるが、馬賊の出相な此の地では夕方の進行は危険であるらしい。日本人だつたら思ひ切つて多倫まで行つて仕舞へと云ふ所であるが、支

那人は流石にそんな短氣なことはせぬ。思慮は深い。多倫邊城に一泊と云ふことに定めたらしいが我々は多少不平である。比較的呑氣な性質の自分でも少しは不平である。然し何が幸となるとも限らぬ。翌日明るい時に邊城から多倫までの間を通つたので、それが石器發見の端緒ともなり、停車して砂丘などを見ることも出来たのである。

然しそれにしても何と云ふ淋しい多倫邊城の夜であらう。第一此所は淋しい草原の最只中に家としては唯數へる程しか無い一寒村である。それに此の宿と云ふのは何と云ふ慘澹たる家であらう。座すべき、食事すべき、寝ぬべき所は土間と異ならぬアンペラも有るか無しかである。

見れば宿の者は切りに草を焼いて居る。それは室を温める爲めの坎である。いぶせき豆洋燈が、漆の様に黒ずんだ柱の所に一燈點ぜられて居る外に明りはない。坎の上が同時にかまどになつて居り、鍋の中では何か煮えて居るらしい

が、何うせ六なものは無からう。

然しよく見れば我々の座敷は未だ此の家中では最上等の座敷なのである。住めば都とはよく言つた。不思議な位此の家が懐しくなる。七時過願先生が持參の麵粉から作らせて呉れた麵の中へ、かけるべきだしもないので、持參の羊肉を入れて食事する。飢えれば甘い云ひ度いが實際變な味である。土地の漬物を食つて見たら美味しからうと試して見たが、如何にか物食ひの自分も少し閉口だ。漸くの事で食事を濟ませる。

食後薄明の庭へ出て見る。ほつとした氣持である。坎の煙突からは草を焼いた煙が上る。餘り寒くもなく、蒙古の天は日本の空より廣い様な氣がして快いが、然しながら旅情はひしひしと湧いて來るのを禁じ得ない。月が出て居る。月夜の蒙古の寒村、廣々とした天地の間に唯哀愁の情を味ふのである。遠くに野を焼く火が見える。幻の都でも浮び出した様に赤い。

八時半同宿の支那人等とすず汚いアンペラの上に薄い持參の毛布を敷いて雜魚寢する。別世界である、面白い經驗であると思ひながら安々と眠る。馬賊の事なんか忘れて仕舞つた。

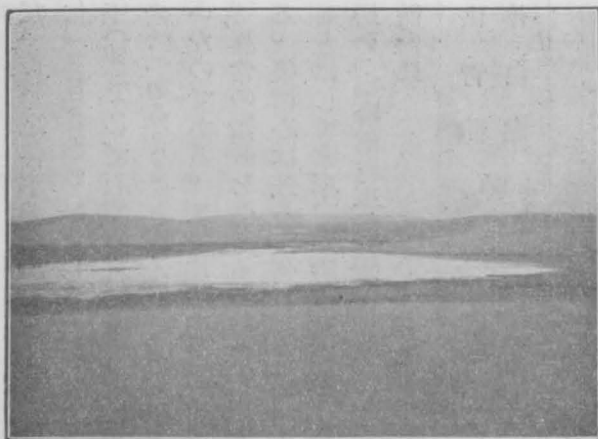
四月十四日、月曜日、晴。五時半起床、野天に便糞する。水が不足で手を洗ふことが出來ぬ又洗面することも出來ぬ。食事もせず支那人の飲み残した一杯の茶を貪り喫して出發する。時に六時である。

多倫の手前に立派なバルハン型砂丘の存在するのを見る。唯々狂喜の外ない。此處で早くもこんな立派な砂丘が見られ様とは思はなかつた砂丘の背後には池があり、池には美しい水鳥が浮んで居る。願先生に聞けば野生の白鳥と水鴨とだと云ふ。白鳥等にとつても此所は地上の樂園であらうが、我等も又正に樂園中の存在なのである。砂丘の上には遠望した所全く植物が無い。

幸か不幸か道路に砂が多くて自動車が進まぬ。

果は停車した。自分は狂人の如く砂丘に馳けつ  
け、よじ登つて砂を採集したり寫眞したりする  
足跡が美しい白砂の中に鳥の足跡でも見る様に  
黙々と印せられる。これこそ先人未踏の足跡と  
でも云ふか。空には雁の飛ぶのを見る。第十一

第十圖



北京より多倫まで

第二十圖



圖は多倫西南郊のバルハン型砂丘と背後の池と  
を示し、第十二圖は同砂丘から多倫を望んだ所  
を示す。

石器は無いかと捜して見る。その考へからし  
てインスピレーションの様であつたのに、之れ



も僥倖だ、自動車停車地の極く近くに自分は一塊の石仁 (nucleus) を發見し得たのである。青色の碧玉 (jasper) で石器材料なること明かである。自分は「あるよ」と叫んだ。石器發見の見込が着いたのである。又一片の碧色の碧玉を發見する。異常の緊張を覺える。唯自動車は待つて呉れる。後に心は残るが何れ多倫から引返して來ることにして乗車、九時多倫に着。自動車の發着所を「察哈爾汽車隊站」と云ふ。其の館内に

供 青 龍  
俸 白 虎 神 々 位

供 天地三界十方萬靈眞宰神位

として神を祭つた所がある。こう云ふ土俗を詳しく調査したら面白いと思ふ。

十時、拉氏公館に着き、此所で暫らく泊めて

貰ふことになる。多倫には支那人が非常に多い。その地は蒙古であるが、多倫の住民は蒙古人よりも支那人の方が多い位である。そして支那旅館も汚らしいながら數軒はある。然し何處の支那旅館へ行つても門前拂ひである。此所の支那人は日本人は泊めぬ事に不泊同盟を結んで居るのかと思はれる位で少々氣持が悪い。それで蒙古人の名家拉氏の家に泊めて貰ふ様に顧先生が交渉して呉れそれで快く迎へられたのである。支那人の旅館では泊めて呉れないからと云ふのが顧先生から拉氏への持つて行き方であつた様に思ふ。

十時半拉氏の案内で市内の清真飯店に至り朝食をとる。料理屋であるが一膳めし屋の様でもある。

食事中顧先生に聞けば、砂丘背後で見た白鳥は白鷗と云ひ、尙ほ色のある鳥も居たがあれは水鴨である、砂丘のことを沙子と云ふと話された。

拉氏は名を拉錦銘と云ひ、錫盟々長駐多代表察哈爾左翼三路蒙兵遊擊隊總部諮議、兼駐多辨公處々長、錫盟阿巴嘎旗邊境戒嚴部検査官なる肩書を有する人で、整つた顔つきの人である。その話しに、多倫は人口三萬位を有するが、近年不景氣のため店を閉じたものが百二十軒ばかりに達する、又財政逼迫のため喇嘛僧の此の地を去つて五臺山に至るものが多いと云ふ。

十二時半朝食を終り、拉氏公館に歸る。途に幌馬車を見た。又蒙古人は餘り洗濯をせぬと聞いたが拉氏の宅では洗濯する人を見た。

此の地の東百里の所で木炭を製し百斤三圓位であると云ふが、此の地では普通燃料としては草の乾したものを用ふ。之れを坎の中に燃すのであるが、煙の強いことは座するに堪えぬ位である。燃料としては又牛馬糞を使用する。尙柳の枝を用ふこともあるが之は大分上等の燃料であるらしい。

流石に家畜の國である。牛糞を以て土塀を築

いたのや、牛糞を家根の上に乾して居るのや、街上に羊、犬、馬、牛等の白骨の棄てられて居るのや、土塀の土の中には動物の骨が至る所に混ぜられて居るのやを見る。

支那人は餘程小鳥が好きらしい、百靈と稱す

第三十圖



る雲雀の様な鳥を飼つて居る。

多倫の下水は矢張街の中央を通つて居る。大抵は暗渠式らしいが、或場所では無蓋である。

そしてその中には未だ融けやらぬ氷が見られる。四月中旬だと云ふに氷が残つて居る。流石に多倫の冬は寒いんだと思ふ。第十三圖は多倫の下水を示す。

市の八方には舊式の砲臺があり、例へば乾臺とか震臺とか名づけられて居る。

此の門を出て一寸郊外に出て見る。乾草を引いて行く牛車を見る。此の牛車の車輪は第十四圖に見る如く⊙形である。

今朝多倫到着前に見た砂丘は大體多倫の西南に當るが、砂丘は多倫の西方にも連亘するのが認められる。燃料用の柳枝を町の方に運搬して行く牛車を見る。

喇嘛廟に向ふ。その途中又もや石器材料らしい一個の黄色の碧玉を拾ふ。遺跡發見の可能性は益々濃厚になつた。

午後三時、勅建、善因寺と稱する喇嘛廟に至

第 十 四 圖



る。東西兩廟に分れ、此の附近にも蒙古包 (Mongu gur) が見られる。

四時西廟に至る。此の途中で又江上君が石器材料らしい緑色の碧玉を拾ひ、石器發見の可能性

性は更に強くなる。

五時拉氏公館に歸る。市門の附近に子供の弓を弄ぶものを見た。

## 伊 太 利 と こ ろ ぐ (十九)

六時、持參の麵麴とジャムとで夕食を済ます。淋しい食事ではあるが、不平を云ふ者は無い。

### 瀧 川 規 一

【アシシ寺院の内陣參拜】 眞夏の照りつける陽光は故國の暑熱を想起せしめる程に、屋根の瓦も庭の土も觸るる手を焦がさんばかりに熱してゐる。目的とする靈地は汽車の停車場から尙二哩許りもある。乗合自動車に汗染みた身體を詰め込まれて玉なす汗を拭きながら寺院附近のウキンザ・ホテルに着く。旅の身の不養生を恐るゝホテルで喰べたアイスクリームの快味は今日までも忘れ兼ねる。

【下の寺】 寺院の入口に入るや堂内薄暗く冷氣さへ加つてそれが何よりも快感を覺える。入口 (Vestibule) から奥へへと進むにつれて澤

山な壁畫に目が留まる。近代繪畫の父なりと稱せられてゐるフロレンスの畫家ジョヴァンニ・チマブエ (Giovanni Cimabue) 及びその先輩のどことなく浮世離れの感じのする繪をはじめ、フロレンス派、シエンナ派、ウムブリア派の代表的畫家の麗筆が所狭げに天井や壁にぎつしり並んで居る。

入口近く左側にマドンナが玉座に坐し基督を抱いて居る繪がある。傍に三人の東方の學者が恐ろしい容貌をして立つてゐる。これはオッタヴィアノ・ネリ (Ottaviano Nelli) の筆である。抑もこの下の寺は一二二八年に起工され一二五